一先般前左大臣島津久光殿建白云々ニ付宮内大丞山岡
鐵太郎島津邸ヘ罷越し面謁相願度旨取次ノ者ヘ
被相述候處御會遁無之家令橋原幸五郎海江田武次
兩人罷出應接致候由鐵太郎右兩人ヘ向ヒ申談候ニハ
此程左大臣殿御建言被成候御主意一應御尤ニ候
ニハ存候得共左大臣殿ニ被成方ニハ甚如何ノ事ニ存
候間御面會ニ上萬ト思召取計候為其參殿致候
ニ御遁無之右ニ付吾方迄申置候一体右大臣殿ニハ
主上ヲ御輔佐被成候御大任ニ付御不得意之件
有之候共厳度御參内有之奏聞ヲ御遂ケ被成候
社ソ至當左大臣殿ニハ　主上ヘ御氣質モ承
知ノ為往々御事ニ而殊ニ御親筆ニ

414
A 617
24
大正十一年四月
大隈侯爵家寄贈

主上ナレバドノ様ニモ御達ヒ被方モ可有ト
直ニ御発ヒ
御叡断拝承ト成度ト思召ハ
何ノ決ト成ラン月番殿ヲ申遣ラレタル
雷橋原海江田両人モ外ニ差ヘ無ク唯久光ノ力ヲ
呈ラザル故トノミ答ヘタル儘ニテ別段挨拶モ無
ク引取リタル由

一高知縣士族島本新次郎ノ見込ニハ事ヲ急ニ施シ
政府ヲ改正セントノ旨ヲ旧左府殿ヱ謀リタル由風聞
ナリ

一旧左大臣殿退職後急ニ一ト先帰縣致サルヽ由ノトコロ
元老院議官河野敏鎌帰縣ノ事ヲ止メタル由
敏鎌見込ニハ徳ヲ事ヲ辞シ政府ヲ改革スル
ヿヲ旧左府殿ヱ謀リタル由風聞ナリ

一旧左府殿ハ旧冬議板垣退助殿ト議論別シタル由
其ノ所以ヲ問クニ板垣殿カヲ不及シテ左府殿ヲ
遣ハントシタルヿヲ左府殿黨ヨリ窺ヒ知リ離間シ
タル由右ニ付今日ノ処ニテハ板垣殿ハ獨立ナル由夫
故板垣殿ハ報知新聞ノ株ヲ買取リ新聞上ニテ
政府ヲ破ラントスル事ヲ目論見スル由風聞ナリ

一旧左府殿黨ニテハ左府殿派ハ一手ニ黨ヲ組ミ事ヲ
行ハント目論見スル由風説アリ

一有栖川宮御建言云々ノ事ヲ宮内大丞香川敬三
有栖川宮ヱ詰問シタル由右ニ付家令ニ藤井希璞
恐怖シテ原書ヲ衆人ニ見セタル処俄ニ引度シ
タル由

一先月世日太政大臣ノ矢ヲ上ゲテ海江田内田両人

建言致シタル由其實否未タ不相分其文言ハ頗ル激論ナル由風聞アリ

一鹿兒島縣士族中山忠左衛門ノ処ニ寄留致シ居リ候愛知縣士族丹羽正五郎同縣士族ニテ友人中村某（當時伏見宮家令ナリ）宛ヘ先月六日尋常一通ノ書ヲ認メ差置シ由其後ハ何等書信ヲ送ラス唯文九ノ如シ

近頃ニ至リ右ノ者共ハ今日所迫遂ニ事門ヲ飛出シ気脈通シ合ヒ中ニ共ニ謀リ事ヲ為ス由ニテ時勢ニ一変ヲ試ミ今日ニ場合ニ至リ何ニテ所陽ニ下ル或ハ更ニ奏ニ下ル如ク上陸ニ事迫ル由ニ付中ニ至リ且ハ報ミ中ニ及ヒ或ハ有ラン哉ト存ル尋中上ル

紙ニ表ハ在ル宮家ハ所ヲ中ニ立テ宮家ハ所ヲ通シ節ハ封ヲ付ケテ御家ニ到ル事ハ無ク御家ニ到ル者ハ必ス封ヲ付ケテ到ル事ヲ見聞仕ル中村某ハ十分信教ヲ認シ為ス者ト存ル

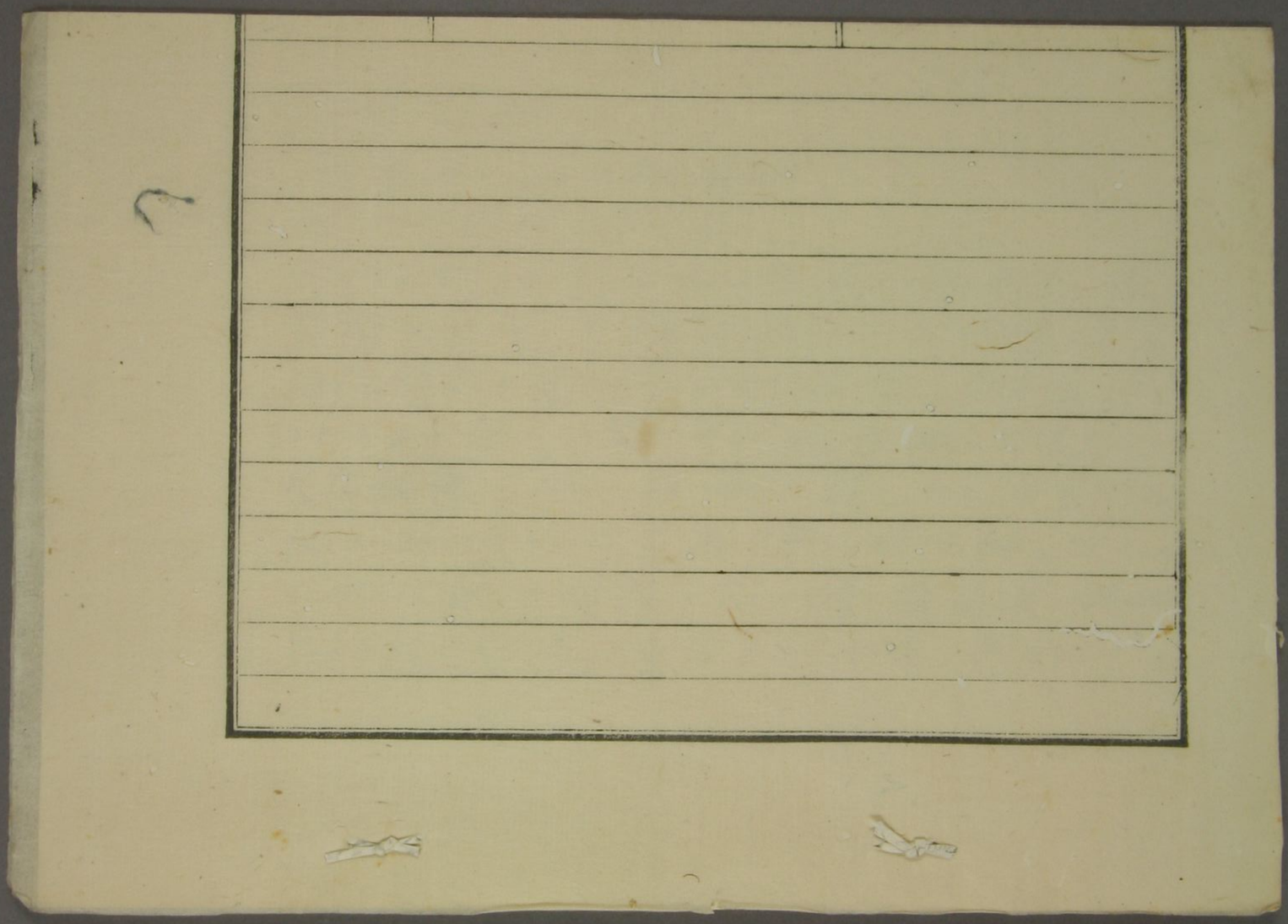
仕候

一去ル月二日二時ノ氣車ニテ司法少丞丹羽賢南海道ニ出張致シタル由南海道ニモ異論起リタルト風説有リ候又四國ニモ議論紛々タル風聞有リ候

右同人ノ傳上中仕候也

八年十一月

一昨一日或ル人ノ咄シニ今般旧左大臣殿ノ建白書ノミヲ見テハ少シノ激論ノ様ニ思ヒ板垣殿ノ建言書ヲ見テ又有栖川熾仁宮ノ建白書ヲ見ルハト大坂會議以来ノ事實ヲ誤リタルハ太政大臣ニアヘカト衆人ノ疑ヒ出テタル由實ニ太政大臣ハ百官統轄ノ術ニ乏シキトノ説起リ旧左府ニ関係無之者迄モ太政大臣ヲ黙ケズンバ各國ノ奴隷タラン丁見ヘガ如シト云ヒテ慷慨スヘ者世間一般有之由風聞致シ候

右聞込ノ儘上申候也

八年十一月